

ぼんぼん時計

JSPS Bonn Office

独立行政法人 日本学術振興会 ボン研究連絡センター
四半期報告
(2004年4月～6月)

2004年7月5日
萩尾 生

1. はじめに

2004年5月1日、それまで15か国から構成されていた欧州連合(EU)が、新たに10か国を迎え入れ、拡大EU発足の運びとなりました。新規加盟国は、チェコ、エストニア、キプロス、ラトヴィア、リトアニア、ハンガリー、マルタ、ポーランド、スロヴェニア、スロヴァキア。25か国から成る拡大EUは、人口約4億5,000万人、域内総生産で米国に迫る規模となります。

新規加盟国の地理的位置を見れば、EUが東方へ向けて拡大していることが一目瞭然です。ドイツは、地政学的にEUの中心部に位置することとなり、ヒト、モノ、サービスの域内移動において、重要な役割を果たすことになると思われま

す。去る6月18日、EU首脳会議は、拡大EU諸国の基本法になる「EU憲法」条約を全会一致で採択しました。同条約によれば、EU大統領や外相職が新設され、肥大した組織の意思決定を速やかに行うため、新たな多数決制度が設けられました。また、欧州議会の役割を強化するなど、市民の参加を促す仕組みが採用されています。もっとも、この憲法が発効するには、加盟国すべての批准が必要となります。

加盟諸国の政治・社会・経済・学術・文化の動向は、この先、一国主義的な視点で把握することがますます困難になると思われま

2. ドイツ連邦レベルでの学術動向

◎研究助成費、100億ユーロの増額が必要

連邦政府は、5月5日、2004年版連邦研究報告書(*Bundesbericht Forschung 2004*)の発表に臨み、「国家財政は圧迫しているが、国と経済界が今後5年間に100億ユーロを投入しなければ、ドイツの高い研究レベルを維持することができない」と強く訴えた。4年毎にドイツの研究助成を概括する同報告書によると、研究開発費は1998年の10億ユーロから現在の約90億ユーロと増加している。2002年の研究開発費総額は533億ユーロ(国民総生産の2.52%)で、そのうち31.5%が連邦政府と州政府からの拠出であった。

Bulmahn大臣は、2005年度予算について、3%アップあるいは2億5,000万ユーロの増額を申請しており、それに加えてエリート大学助成構想に毎年2億5,000万ユーロをEichel財務大臣に要請している。

同報告書においてBulmahn大臣は、1998年の政権交代以後、研究技術助成分野での高い実績を挙げ、世界技術市場においてドイツがトップポジションに達したことを示唆している。ハイテク・先端技術製品の貿易黒字は、2002年に約1320億ユーロにのぼり、研究投資の割合が高い製品については、ドイツの市場占有率は14.9%と世界2位(1位は19.4%のアメリカ)であったという。

ドイツの研究システムの実績は、国際的な学術論文発表数のシェア率にも現れている。アメリカ(32%)、日本(10%)に続き、ドイツ(9%)は3位となっている。また、住民100万人に対する国際的特許取得件数についても、ドイツは127件と日本(164件)に続いて2位である。

特に旧東独地域への研究開発費が増えており、20億ユーロ(総額の23.3%)を超えている。これは1998年では17億ユーロであった。「InnoRegio」プログラムに代表される集約的な助成プログラムにより、旧東独地域ではイノベーション・インフラが整備され、過去2年間で、同プログラム支援企業の2/5が特許申請を行っている。新製品で市場参入、または新技術を開発した企業も多いが、その一方で開発技術を商品化させるためのリスク資本が減少している。

同報告書によると大きな進展を遂げた分野はレーザー技術分野である。この分野は80年代には輸入に頼っていたが、集約的な研究助成によって、材料加工に使われるレーザーの40%が国内生産されるようになった。レーザー部品・機器製造には11万人が従事しており、過去数年間で5万の新規雇用を生み出している。

ドイツは今日、IT分野において世界でもっとも進んだIT拠点の一つであり、「IT研究2006」政策によって30億ユーロが拠出されている。ドレスデン地域はヨーロッパのシリコン・バレーとして60億ユーロの外資投下をもたらし、間接的に1万1,000件の新規雇用が生まれている。

21世紀のキー・テクノロジーとして重点的に助成されているバイオテクノロジー分野では、ドイツ25地域に散らばる若手企業600のうち360企業が活動しており、これはヨーロッパ随一の数となっている。同分野には2003年に7億1,500万ユーロが拠出されている。

また、ナノテクノロジー分野では、1998年に2,760万ユーロだったプロジェクト助成費が2004年には1億2,380万ユーロと4倍以上に増加している。連邦経済省によるプロジェクト助成費と研究機関の助成費を合計すると、今年の2億9,310万ユーロから、2005年には2億9,830万ユーロに上昇すると予測される。

参考: *dpa*, Nr.20/2004, 10. Mai, 2004
<http://www.bmbf.de/pub/bufo2004.pdf>

◎「エリート大学群」構想(続)ー連邦政府と州政府が共同助成に合意か?ー

連邦政府と州政府は4月初旬より、次官レベルでエリート大学助成プログラム実施方法について内密に審議を重ねてきたが、Bulmahn連邦教育研究省大臣と州政府文部大臣によるベルリン会合で、ようやくその突破口が見出された。Die Welt紙の情報によれば、連邦政府は2010年までに年間2億8,500万ユーロを「学術・大学研究促進のための連邦・州エクセレンス・イニシアチブ」に投入し、州政府はそれに対して年間約9,500万ユーロを拠出する意向である。大学が実際に助成を受けるのは2006年以降で、プログラムは2010年までとし、連邦と州は助成総額19億ユーロと見込んでいる。もっとも、連邦も州も予算審議中であることから、助成費拠出の確約はまだ保留となっている。

連邦政府と州政府は、3月末にエリート大学助成プログラムの大枠について合意していた。それによると、以下の分野が対象とされていた。

- ・大学の構造的発展促進を目指した、特徴的な大学内研究分野を基盤とするエリート大学助成
- ・ハイレベルな研究促進のためのエクセレンス・センター/エクセレンス・クラスター創出
- ・若手研究者育成のための大学院設立

この連邦・州イニシアチブにより、約40の大学院が各々年間100万ユーロ、また30のエクセレンス・クラスターが各々年間800万ユーロの助成を受ける見込みである。また、エリート大学として年間2,500万ユーロの助成を受けるためには、大学は少なくとも一つの大学院と一つのエクセレンス・クラスターを擁するものとする。連邦と州は、そのような大学はドイツ全体で約10校と予想している。ドイツ研究協会(DFG)および学術審議会(WR)の代表と国際的なエキスパートから成る非政治的な審査委員会が、大学が申請する応募書類を審査する。

各州の文部大臣は、選抜されたエリート大学、大学院、エクセレンス・クラスターの助成金の約25%を州政府が負担することに合意した。連邦政府は75%を負担する。州政府側がこの付加的な資金負担を不可能とする場合、該当大学は助成対象外となる。

このエリート大学助成に関する論争は年初に始まった。連邦政府は、本来、4～5つの大学を公募して年間5,000万ユーロで助成する構想だったが、州政府は「エクセレンス・ネットワーク」構築を目的とする、個々の研究分野的を絞った助成を支持していた。今回、決議されたイニシアチブは双方の構想を顧慮したものであるが、州政府側の、より幅広く、制限の少ない競合コンセプトが最終的に押し通った形になっている。なお、大学単位の個別助成については満場一致で否決されている。

このイニシアチブが実際に2006年にスタートできるかは、連邦政府と州政府の予算審議にかかっている。殆どの州で学術研究予算は削減されており、それは連邦政府でも同様である。Bulmahn大臣はEichel経済大臣に学術研究予算の増額を要請したところであるが、情報筋によるとEichel経済大臣は大学構築とプロジェクト助成部門については削減の方針を曲げないようである。

6月8日、Bulmahn大臣は大規模研究機関予算を2010年まで毎年、最低3%アップすると公表した。これによって連邦政府は来年だけでも1億ユーロ以上も多く大規模研究機関に投資することになる、とBulmahn大臣は語った。その目的としては、研究開発費を2010年までにGDPの3%までアップさせることである。この数値はこれまで2.52%となっていた。

以上は、6月9日付けDie Welt誌からの記事要約であるが、直後の6月11日付けF.A.Z. Weekly誌によると、ヘッセン州文部大臣のU. Corts氏は、上述のような合意はなかったと言明した。ところが、Corts氏は、ベルリン会合に出席していなかった。反対に、同会合に出席していたザクセン州文部大臣のM. Rössler氏は、財政支援の型については「事実上合意した」が、その合意については当日欠席だった州文部大臣と協議することになった、と説明する。

まだまだ混乱が続く「エリート大学群」構想であるが、7月上旬に再び開かれる連邦政府と州政府との会合において、最終的な判断が成されるものと思われる。

参考: *Die Welt*, June 9, 2004
F. A. Z. Weekly, June 11, 2004

◎ドイツの頭脳流出は予想以下—ドイツ研究協会(DFG)発表—

ドイツ研究協会(DFG)は、5月4日にボンで、「同協会による調査の結果、ドイツの優秀な研究者の国外流出は予想ほど深刻でないことが判明した」と発表した。この「学術研究とキャリア—DFG給費生の体験と経歴」調査では、過去の給費生1,400名以上を対象にアンケートが行われた。

調査されたのは給費期間の体験とその後の職業上の進路で、対象となったのは1986~87年、1991~92年、1996~97年にDFGによる3プログラム(ポストク・プログラム、大学教授資格取得者プログラム、研究プログラム)のいずれかを得た研究者である。

その結果、3/4の研究者がドイツ国外(主にアメリカ)に研究渡航したことがわかった。もっとも、現在も学術分野に従事している研究者の85%がドイツで働いており、アンケートに答えた14%が既に学術研究分野から離れていた。

また、約80%が現在の職業上の地位に満足しており、59%が職業に関して自分の志望どおりになっている、と答えていた。DFGは調査結果の総括として、ドイツの若手研究者の頭脳流出は世間で騒がれているほど深刻ではないとしている。なお、DFGは今回の調査を若手研究者助成の発展的措置に生かす意向である。

参考: DFG, *Pressemitteilung* Nr. 19, 4 Mai, 2004
http://www.dfg.de/zahlen_und_fakten/stip2004.html

3. ボン研究連絡センターの活動

◎来訪&訪問

【4月】

4月 1日(木) 神林祐代研修員、来独。

- 4月 2日(金) 田中センター長、萩尾事務官、デュッセルドルフ総領事館を訪問し、「日本デー」について協議。対応者は、神余隆博総領事、角田剛隆領事。
- 4月 10日(土) 田中センター長、「欧米センター長会議」出席のため、一時帰国(～14日)。
- 4月 16日(金) 萩尾事務官、「日本学術振興会の独法化と欧米海外研究連絡センターの業務遂行に関する会議」出席のため、一時帰国(～20日)。
- 4月 21日(水) 田中センター長、萩尾事務官、Ganter 職員、Schulze 職員、神林研修員、ヨーロッパ先端学術研究センター(CAESAR)を訪問し、同財団の組織運営について質疑応答。対応者は、学術ダイレクター・Dr. Karl-Heinz Hoffmann 他2名。
- 全スタッフ・ミーティング(センター長会議、事務官会議の報告等)。
- 4月 26日(月) 田中センター長、萩尾事務官、フンボルト財団前事務局長の Dr. Osten 夫妻と日独学術交流について協議。
- 4月 28日(水) 萩尾事務官、Ganter 職員、Schulze 職員、神林研修員、「日本デー」会場選定ほか打ち合わせのためデュッセルドルフ市訪問。
- 4月 30日(金) 文部科学省・国際統括官・永野博氏、来訪[対応:萩尾、神林]。

【5月】

- 5月 1日(金) マーブルク大学・教授 Dr. Heinrich Menkhaus 氏、ケルン大学・講師・Dr. Ingrid Fritsch 氏、ボン大学・講師・Dr. Andreas Marx 氏、来訪[対応:萩尾、Ganter]。
- 5月 12日(水) 田中センター長、萩尾事務官、Ganter 職員、Schulze 職員、神林研修員、第9回日独学術シンポジウム開催準備のためハレヘ(～16日)。

- 5月14日(金) 第9回日独学術シンポジウムをドイツ日本学術振興会研究者同窓会と共催(於ハレ)(~15日)。詳細は後述。
- 5月16日(日) 日本学術振興会・国際事業部・国際研究協力課・事務員・中里千鶴子氏、来訪(~17日)[対応:萩尾、神林]。
- 5月18日(火) 北海道大学・大学院理学系研究科・教授・馬渡駿介氏、ゼンケンベルク自然博物館・研究員・Dr. Joachim Scholz氏、来訪[対応:萩尾、神林]。
- 5月26日(水) 田中センター長、萩尾事務官、ケルン日本文化会館・館長・本間豊氏表敬訪問。対応者は、館長・本間豊氏、マネージャー・大西真氏、文化担当・佐々木寿子氏。
- アレクサンダー・フォン・フンボルト財団・事務総長・Dr. Georg B. Schütte氏、来訪。事務総長着任後初の公式な表敬訪問。[対応:田中、萩尾、Ganter]。
- 5月27日(木) 萩尾事務官、ドイツ学術交流会(DAAD)との協議。DAAD側対応者は、アジア・オーストラリア・ニュージーランド・オセアニア・北アフリカ・近東課長Dr. Ursula Toyka-Fuongほか1名。
- 5月28日(金) 萩尾事務官、デュッセルドルフ大学・事務局長・Mr. Königを訪問し、6月5日開催予定の「日本デー」の広報協力を要請。

【6月】

- 6月4日(金) 田中センター長、萩尾事務官、日独学術交流講演会準備のため、デュッセルドルフへ(~6日)。
- 日本学術振興会・学術システム研究センター・副所長・石井紫郎氏、来独(~6日)。
- 石井紫郎副所長、デュッセルドルフ総領事主催夕食会に出席。田中センター長同行。
- 6月5日(土) 石井紫郎副所長、田中センター長、萩尾事務官、アレクサンダー・フォン・フンボルト財団(AvH)との協議。対応者は、AvH名誉顧問Dr. Heinrich Pfeiffer、副事務総長Dr. Gisela Janetzke、海外フォローアップ事業部第二課長Dr. Rheinhardt-

Segawa。

「日本デー」の一環として、ドイツ日本学術振興会研究者同窓会との共催により、「日独学術の架け橋—変革のための協力—」と称する日独学術交流講演会を実施（於デュッセルドルフ）。

6月7日(月) 萩尾事務官、フンボルト財団(A v H)・選考第3課長・Dr. Johannes Belz氏を訪問し、同財団のマネージメントシステム等について聴取。

萩尾事務官、ドイツ研究協会(D F G)・研究振興専門部の Mr. Michael Schuster を訪問し、同協会のマネージメントシステム等について聴取。

6月8日(火) 田中センター長、ハイデルベルク大学にて理論天文学に関する共同研究(～10日)。

6月9日(水) フンボルト財団(A v H)の海外事業フォローアップ第3課長・Dr. Rheinrand-Segawa 来訪[対応:萩尾、Ganter、Schulze]。

6月14日(月) 田中センター長、萩尾事務官、Ganter 職員、Schulze 職員、神林研修員、フンボルト財団(A v H)の年次総会に出席。

6月15日(木) 田中センター長、ジーボルト賞授賞式出席(於ボン)。

萩尾事務官、Ganter 職員、神林研修員、国連大学・環境と人間のセキュリティ研究所・開所式出席。

6月29日(火) 萩尾事務官、神林研修員、元学振外特フェローで現在CNRS 研究員の Dr. Uta Schädel 氏を訪問し、滞日中の受入研究機関における化学物質の安全管理についてインタビュー(於ストラスブル)。

萩尾事務官、神林研修員、日本学術振興会ストラスブル連絡事務所を訪問。対応者は関事務官。

◎第9回日独学術シンポジウム 《ナノサイエンスの最先端》

本シンポジウムは、ボン研究連絡センターが「ドイツ日本学術振興会研究者同窓会」との共催により、例年ドイツ国内で実施しているものである。本年度は、去る5月14日、15日の2日間にわたり、旧東ドイツ領ハレ市のケンピンスキーホテル内会議場 Congress Centre Rotes Ross にて開催された。

今年度のテーマには、情報、エネルギー、環境、バイオテクノロジーなど様々な分野への応用が可能な新技術として注目されている「ナノサイエンスの最先端 (Frontiers of Nanoscience)」を設定し、日独双方からそれぞれ3名の研究者が講演者として出席した。

講演に先立ち、同窓会会長を務める Heinrich Menkhaus マールブルク大学教授から開会の辞が述べられ、引き続き在ドイツ日本国大使館の岩谷滋雄公使、ハレ＝ヴィッテンベルク大学の Wilfried Grecksch 学長、ハレ市長代理の Ms. Anke Ruprech 氏、フンボルト財団の Gisela Janetzke 副事務総長、そして本会から伊賀健一理事が挨拶し、本シンポジウムを通しての日独学術交流強化への期待が述べられた。

その後、日本側からは、外村彰日立製作所基礎研究所フェロー、河田聡大阪大学大学院工学研究科教授、相澤益男東京工業大学長の3名が、それぞれ”The Quantum World Unveiled by Electron Waves”、”Nano Optics beyond the Diffraction Limit”、”Challenges of Bio-nanotechnology”と題する講演を、ドイツ側からは、マインツ・マックスプランク・ポリマー研究所 Wolfgang Knoll 教授、マックス・プランク微細構造物理学研究所 Margit Zacharias 研究員、ダルムシュタット工科大学 Alfred Nordmann 教授が、おのおの”Nanoscopic Building Blocks from Polymers, Metals and Semiconductors for Hybrid Architectures”、”Nanostructures – à la carte”、”Nanotechnology: Convergence and Integration”と題する講演を行った。

会場には同窓会の会員をはじめ、地元ハレ市やドイツ各地から参加した研究者、ハレ大学の学生など計約240名が参加し、高度な内容の講演を熱心に聞き入り、鋭い質疑応答が交わされた。第一日目(14日)のプログラム終了後にハレ市内の視察が行われ、参加者全員によるビュッフェ形式の夕食会が、「ヨーロッパでもっとも古い」寄席演芸場の1つといわれる Steintor-Variété にて催され、多くのテーブルでなごやかな懇談が続いた。

シンポジウム2日目は、講演に先立ち「Instruments of Funding German-Japanese Scientific Exchange」というセッションが設けられ、日独双方のファンディング・エージェンシーによる事業・組織紹介が行われた。ドイツ側からは、ドイツ研究協会 (DFG) の Dr. Gernot Gad 氏により、DFG、フンボルト財団、ドイツ学術交流会(DAAD)およびマックスプランク研究協会(MPG)の主に国際交流事業の概要説明があった。続いてボン研究連絡センターの萩尾生事務官が独立行政法人となった学振の概要について説明が行われた。

シンポジウムに対する聴衆の反応は良好で、とくにナノサイエンスを専門とする研究者からは、講演内容のレベルの高さを賞賛する声が相次いだ。その一方で、

専門をやや異にする研究者からは、講演内容がまったく理解できないとの意見も出され、学術領域の専門細分化の加速化が実感された。なお、最後の講演者である Prof. Dr. Alfred Nordmann の哲学的アプローチによる講演は、ある意味で科学者のモラルを問いかける内容とも言え、シンポジウム終了後も賛否両論が沸き立った。議論を喚起したという意味では、成功だったと言えよう。



,'Frontiers of Nanoscience'

jointly organized by

Japan Society for the Promotion of Science

and

Deutsche Gesellschaft der JSPS-Stipendiaten e.V.

May 14 and 15, 2004 in Halle (Saale)

Congress Centre Rotes Ross, Franckestr. 1, 06110 Halle (Saale)

Friday, May 14, 2004

12.30 *Coffee Bar*

13.30 **Welcoming Remarks**

Moderation: Prof. Dr. Heinrich Menkhau

Chairman, Deutsche Gesellschaft der JSPS-Stipendiaten e.V.

14.00 **Prof. Dr. Akira Tonomura**, Fellow, Hitachi, Ltd.

‘The Quantum World Unveiled by Electron Waves’

14.45 **Prof. Dr. Wolfgang Knoll**, Director, MPI for Polymer Research

‘Nanoscopic Building Blocks from Polymers, Metals and Semiconductors for Hybrid Architectures’

Convener: **Prof. Dr. Andreas Schlachetzki**, TU Braunschweig

15.30 *Coffee Break*

16.00 **Prof. Dr. Satoshi Kawata**, Osaka University and RIKEN

‘Nano Optics beyond the Diffraction Limit’

Convener: **Prof. Dr. Andreas Schlachetzki / Dr. Achim W. Hassel**

16.45 sight-seeing tour Halle

18.15 return to Hotel Dorint Charlottenhof

19.00 shuttle bus to Steintor Variété

19.30 *reception and dinner, Steintor Variété*

22.00 – 22.30 shuttle bus to Hotel Dorint Charlottenhof

Saturday, May 15, 2004

9.00 **Instruments of Funding German-Japanese Scientific Exchange**

Joint Presentation by AvH, DAAD, DFG, MPG and JSPS

9.30 **PD Dr. Margit Zacharias**, MPI of Microstructure Physics

‘Nanostructures – à la carte’

10.15 *Coffee Break*

10.45 **Prof. Dr. Masuo Aizawa**, President, Tokyo Institute of Technology

‘Challenges of Bio-nanotechnology’

Convener: **Dr. Achim W. Hassel**, MPI für Eisenforschung

11.30 **Prof. Dr. Alfred Nordmann**, TU Darmstadt, Institute of Philosophy
'Nanotechnology: Convergence and Integration'

Convener: Prof. Dr. Wolfgang Ertl, University Erlangen-Nürnberg

12.15 *Lunch*

13.30 **Annual Assembly**
- 15.00 Deutsche Gesellschaft der JSPS-Stipendiaten e.V.
Hotel Dorint Charlottenhof

13.30 leave Congress Centre Rotes Ross by bus to Wittenberg
ca. 17.00 return to Hotel Dorint Charlottenhof

15.00 leave Hotel Dorint Charlottenhof by bus to Wittenberg
ca. 18.30 return to Hotel Dorint Charlottenhof

◎日独学術交流講演会 《日独学術の架け橋—変革のための協力—》

6月5日(土)に、デュッセルドルフ市において、ノルトライン=ヴェストファーレン(NRW)州、デュッセルドルフ市、同市邦人社会の3者共催による日本紹介イベント「日本デー」が開催された。当該センターは、この関連プログラムの1つとして、「日独学術の架け橋—変革のための協力—」と称する日独学術交流講演会を主催した。

講演会冒頭、NRW州学術研究省事務次官のH. Krebs氏より、今後さらなる日独学術交流の発展を両国が模索する必要があること、2005~2006年の「日本におけるドイツ」事業は、今後の発展にとって重要な契機として活用すべきである旨、挨拶があった。続いて、ドイツ日本学術振興会研究者同窓会会長でマールブルク大学教授のH. Menkhaus氏より、同窓会の活動と存在意義について説明があり、当該センター長の田中靖郎より、日本学術振興会と当該センターの活動・役割について紹介がなされた。

最初の講演者であるデュッセルドルフ大学長A. Labisch氏は、森鷗外の短編『普請中』に着想を得た「普請中：社会的変革の中の日独学術協力—歴史的比較—」という講演題目により、岩倉施設団に始まる日独学術交流の長い歴史を鳥瞰した後、今後の日独交流は、文化交流からはじめ、それが結果的に学術の交流につながるのではないかと述べた。

休憩をはさんで、デュッセルドルフ総領事館の神余隆博総領事が、個人的所見としながら、日独両国が今日共通して抱える諸問題を断ずるとともに、今後の日独交流のあり方について提言した。

最後に、2人めの講演者である日本学術振興会学術システム研究センター副所長の石井紫郎氏が、「学術の多様性：日独学術協力のコンセプト」について、主として日本側に視点から論じた。

講演に引き続いて、アーヘン工科大学教授の J. Okuda 氏の司会により、講演者と聴衆との間で、白熱した議論が行われた。聴衆は約 60 名。AvH や DFG など本会対応機関関係者のみならず、関係学術省庁、大学、研究所、独日協会関係者など、デュッセルドルフ市や近郊のアーヘン、ボン、ケルンのみならず、遠くはフランスのストラスブールからも参加者があった。

講演会終了後、本講演内容を是非とも刊行してほしいとの要望が多数寄せられ、講演内容の質の高さと、聴衆の反響の良さが伺えた。

以下に、参考まで、当日のプログラムと写真を掲載する。

Akademische Brücken **zwischen Japan und Deutschland** **- Kooperation für Innovation -**

organisiert von

Japan Society for the Promotion of Science (JSPS), Bonn Office
und
Deutsche Gesellschaft der JSPS-Stipendiaten e.V.

5. Juni 2004, Japan-Tag Düsseldorf / NRW

Forum im Finanzkaufhaus, Berliner Allee 33, 40212 Düsseldorf

14.00 Uhr Möglichkeit zu Gesprächen

14.15 Uhr Begrüßung
Staatssekretär **Hartmut Krebs**, Ministerium für Wissenschaft und Forschung

NRW

Prof. Dr. Heinrich Menkhaus, Vorsitzender, Dt. Gesellschaft der JSPS-Stipendiaten e.V.

Prof. Dr. Yasuo Tanaka, Direktor, JSPS Bonn Office

14.45 – 15:30 Uhr

Prof. Dr. Alfons Labisch, Rektor, Heinrich-Heine Universität Düsseldorf

„Im Umbau: wissenschaftliche Kooperation zwischen Japan und

Deutschland in Zeiten sozialen Wandels – ein historischer Vergleich“

15.30 Uhr Kaffeepause

15.50 Uhr **Prof. Dr. Takahiro Shinyo**, Generalkonsul, Japanisches Generalkonsulat
Düsseldorf

16.00 – 16:45 Uhr

Prof. Dr. Shiro Ishii, ehem. Vizepräsident The University of Tokyo;
Deputy Director, JSPS Research Center for Science System

*„Für die Diversität der Wissenschaften: das Konzept akademischer
Kooperation zwischen Deutschland und Japan“*

16.45 Uhr Allgemeine Diskussion
Leitung: **Prof. Dr. Jun Okuda**, RWTH Aachen

Der Eintritt ist frei.

Kontakt: JSPS Bonn Office, Ahrstr. 58, 53175 Bonn, Tel.: 0228/375050, Fax:
0228/957777

www.jsps-bonn.de jsps-bonn@t-online.de



◎その他の活動

- 日本学術振興会パンフレット等の対応機関等への配布
- 情報提供ホームページ”forschen-in-japan.de”の拡充作業
- ドイツ語版ニューズレター(ルンド・シュライベン)等の作成・配布
- 各種情報収集提供業務
- 日本学術振興会事業の広報(資料出展、新聞広告掲載ほか)

4. 今後の予定

- 7月 7日(水) ドイツ研究協会(DFG)年次総会出席。
- 7月 16日(金) ドイツ研究協会主催、「日独学术交流に関するセミナー」出席(於ボン)。
- 8月 11日(水) 日本学術振興会・学術システム研究センター・内海先生、来訪。
- 9月 1日(水) JSPS Abend開催(於ボン)。
- 10月 8日(金) ドイツ日本学術振興会研究者同窓会主催、第2回「会員による会員の招待」出席(於ケルン)。